

## 鳥井畑のお秋哀歌

求菩提山の入口。八丁坂の辺りに秋霧台というたいそう霧の深う立ちこめる所がある。この霧にまつわる哀しい話があつてなあ、今も村人たちに語り継がれているそうじゃ。今日はそんな、哀しい哀しい話をしようかのう。

そん昔、もう三百年も昔になろうか、求菩提山のふもとにある鳥井畑に伝わるお話じゃ。その求菩提の山すその村にお秋というたいそう美しい女があつた。年のころは二十七、八。すらりとしておつて、とても子どもがおるようには見えんじやつたそうな。

このお秋はな、築城の寒田からよめに来ておつた。

なんでそんな遠い所からと不思議に思つじやるな。そのころ求菩提の山には山伏が住んでおつて、五百人とも六百人ともいわれる人々でにぎわつておつた。その求菩提の登り口は二つあつてな、東の登り口が鳥井畑（豊前）、西の登り口が寒田（築城）じゃ。そんなもんでこのふたつの村は行き来もあつてなあ、お秋のように鳥井畑に寒田からよめに来たという人も多かつたそうな。

さてある年の春のこと。お秋のところ里から便りが届いた。ばばさまの体の具合がどうもよくなつたというのじゃ。お秋は、いてもたつてもおられず家のもんになつたのだ。

「ばばさまの具合がどうもよくなえ。こん前の祭りん時から行つちよらんき、今んうちに一目会いてえ。ちよつと里まで行かちよくれ。」

と言つて、次の朝早く、お秋は寒田の里に向つた。

しばらく歩いたお秋は道ばたのお地藏様を見つけると、足を止めて手を合わせた。

「地藏様、どうか、ばばさまをお守りくださいな。」

そのおかげか、寒田に着いたお秋の顔を見ると、ばばさまの病は持ち直した。うす目を開けたばばさまはお秋に言った。

「お秋、わしはもうだいじょうぶじゃ。あっちの家のもんにめいわくかけちゃいかんきの。日の暮れんうちにいぬるがよかるう。」

「ばばさま、すまんことで。またのぞきに來ますき、達者でなあ。」  
お秋はそう言うと、帰り道を急いだ。

ところが山のこと、風の向きが急に変わりなにやらあやしげな模様になってきた。歩き慣れた道じゃったが、帰りの二里半（約十キロ）の道のりは遠かった。やがて行き交う人もまばらになり、日も落ち始めてきた。お秋はすこし心細うなって歩みを早め、とうげをこえ、鳥井畑の村の明りが見え始めてやっとあんどした。そして再びお地藏様のところで手を合わせて拜んだ。

「地藏様、どうかばばさまをお守りくださいな。」

と、そんな時じゃった。松の木のかげから、人かげが一つ二つ。次の瞬間、お秋の体は宙にとんだ。あつという間の出来事で、どうすることもできんじゃった。



人かげはお秋のふろしき包みをうばうと、ぱっと消えてしもった。  
お秋の体は草かげに横たわり、その後は暗やみがお秋を包みこんだ  
んじゃ。

翌朝、山に登っておった村んもんが朝もやの中になにやら白いもの  
を見つけた。よく見るとそれはたおれている人間で、体には刀  
傷がいくつもあり、なんとも無残な姿で横たわっておった。

「おお、これはお秋ではないかっ。」

「お山こしでとうぞくにやられたんじゃろうか。」

「かわいそうに・・・殺しまでせんでも・・・。」

「なんちむごいことを・・・。」

と、村んもんはあまりのむごさに顔をそむけたが、色白の体は、何  
ともあわれな姿であった。

それから半年がたち求菩提に秋風が吹き始めるころになると、なぜかそこはこいきりにおおわれる  
日が多くなったということじゃ。

だれがやったのか、何とも哀しいお話じゃ。

それからというもの、お秋が斬られたこの地を「秋斬り」と呼んでいたが、いつしか秋に霧が深い  
ことから「秋霧」となって地名に残っておる。

長い間お秋の墓はこけむして草むらにうずくまっていたが、お秋がふびんじゃと村人が八丁坂の道



ばたにおろしたそうじゃ。

村人たちは今でもお秋のれいを霧の中に見ることがあるんじゃと。



お秋さんの墓碑